九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

左連結成の思想

中屋敷，宏
筑紫女子短期大学 ： 講師

https://doi.org/10.15017/9832

出版情報：中国文学論集. 1, pp.38-49, 1970-05-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

左連結成の思想

中屋敷　宏

序

左翼作家聯盟（以下「左連」と略称する）の成立を「拓荒者」第三期（一九三〇年三月一〇日）の「国内文壇消息欄」[1]は次のように報じている。

創造社が封鎖され、太陽社、我們社、引擎社等の文学団体が自動的に解散した後、久しく準備してきた左翼作家聯盟の組織は、時機が熟したので、三月二日に正式に成立した。

成立大会は午後二時に挙行し、当日の出席者は馮乃超（中略）等五十数名であった。

開会を宣言した後、魯迅・沈端先・銭杏邨の三人を推薦して主席団を構成した。まず馮乃超・鄭伯奇によって準備経過が報告された。続いたのが中国自由運動大同盟の講演である。以下魯迅・彭康・田漢・華漢等により相継いで演説がなされた。その後準備委員会が起草した綱領を採択し、四時になって選挙を始め、沈端先・馮乃超・銭杏邨・魯迅・田漢・鄭伯奇・洪霊菲の七人を常務委員に、周全平・蔣光慈の二人を候補委員に選んだ。その後提案は合計約十七件の多きにのぼり（後略）[2]

この報道によって成立大会ではたした人々の役割の重さがある程度推測される。特に魯迅の重さが目をひく。ここに名前が出ている人々が成立大会を担った人であるが、同時にその人々によって左連の結成は準備されてきたのである。彼等を文学団体別に分類していくと、創造社系が、馮乃超・鄭伯奇・彭康・周全平の四名であり、太陽系社が沈端先・銭杏邨・洪霊菲・蔣光慈・華漢の五名であり、語絲社が魯迅、南国劇社が田漢である。なお魯迅、田漢を除く全員は中国共産党員である。

このように見てくると左連の内実はほぼ見当がつく。すなわち文学団体から見れば、主力は創造社・太陽社の合同であり、党との関係で見れば党員作家による魯迅かつぎ出し工作である。この時創造社・太陽社は党の指導下にあり[3]、左連結成の準備は党の指令の下に始った[4]、のであるから、左連結成の最大の問題点が一九二八年にあれほど烈しく対立した魯迅と若い党員作家

との和解にあることは、間違いのない所である。そして両者は如何なる必要を認めて、またどのような理論的解決を行なって、このような統一まで達したのか、ということを明かにすれば、その中にこの新しい統一組織「左連」の思想的本質が語られることになると考えるのである。

本稿は以上の観点に立ち、両者の対立から統一へという過程を追求することによって、左連の思想的本質を明かにすることを目的とする。

(一)

創造社・太陽社による革命文学論が文壇を風靡するのは、一九二八年になってからである。（太陽社の主張は「太陽月刊」が入手できないため、正確にはつかめないが、太陽社後期の「拓荒社」所載の諸論文を見るとほぼその基調は創造社と同じであるので、以下革命文学論として一括して扱っていく。）

この革命文学論の特徴は文学の持つ宣伝という機能を、理論の中心軸に据えることである。例えば革命文学論の画期的な論文と言われる「文化批判」第二期、李初梨の「どの様にして革命文学を建設するか」[5]では、アプトン・シンクレアにならって次のように文学を規定することから議論を始めている。

> すべての文学はすべて宣伝である。普遍的に、不可避的に宣伝である。ある時には無意識的に、そして常に故意の宣伝である。[6]

このような文学の本質規定によれば、そこから次のような作品評価の基準が導き出されるのは当然である。

> もしある作品の価値を規定しようとすれば、必ずその内容が社会潮流に対して作用を起しうるか否か、どの様な作用を起こすか、を見なければならない。[7]
>
> プロレタリア芸術はプロレタリアート解放のための宣伝煽動の効果を持つ。宣伝煽動の効果が大きければ大きいほど、このプロレタリア芸術の価値も高い。[8]

ここでは文学作品の評価は、その高い芸術性や思想性ではなく、ただ一つ「宣伝煽動の効果」にのみ求められている。彼等はそのような評価基準は史的唯物論からの必然的帰結だと考えるのである。つまり文学は上部構造の一種であるから、階級社会にあっては不可避的に階級性を帯びる。そこで生産されたイデオロギーは、今後は逆に下部構造の強化に働く、というのは史的唯物論の初歩的テーゼであるが、それを利用しつつ、李初梨は次のように結論する。

> 文学はイデオロギーの一種であり、故に文学の社会的任務はその組織能力にある。[9]

このように言えば、文学は「階級的武器」である以外にはあり様はない。という事は文学のイデオロギー性を意識化し、それをとぎすます以外には文学のあり方はないという事である。

しかし、現在その「階級的武器」はどのようなものでなければならないのか。李初梨は史的唯物論により、中国新文学史を簡単にふり返った後、現在はプロレタリアートの時代が始ったとして次のように言うのである。

> 革命文学は誰の主張でもなく、誰の独断でもない。歴史の内在的発展によって連続している。それは当然にして、

かつ必然的にプロレタリア文学でなければならないのである。[10]

プロレタリア文学は歴史の必然なのであり、作家はただその遂行者としてあるに過ぎない。かくしてプロレタリア文学の現在の大綱は次のように規定される。

芸術活動は社会生活の一分野である。だから階級闘争が尖鋭化した現代では、プロレタリアートの立場に立つ文芸作家はプロレタリアートの意識・感情及び意志で各種の社会事実の真相を暴露し、プロレタリア大衆及び中間分子の革命的闘争を促進し、扇動する目的のために創作に従事しなければならない。これは自覚した文芸作家の当面の任務であり、プロレタリア芸術論の目前の大綱である。[11]

このような作業を経た後、始めてこのような任務をになう作家の問題がとりあげられる。作家はこのような任務をにないきるため、ブルジョア意識の否定、プロレタリアートの世界観―戦闘的唯物論、唯物弁証法の把握、理論と実践の統一、革命家になること[12]、などが要求されるのである。

このような理論的立脚点から魯迅批判が行なわれるのであるが、言っていることは、「彼が反映しているものは、ただ社会変革期中の落伍者の悲哀にすぎない。[13]」「社会に対する認識が完全に盲目である。[14]」ということに外ならない。つまり魯迅はプチブルであり、マルクス、レーニン主義を知らず、現在の革命的情勢を理解しないから時代遅れになっている、というのである。あくどい非難と烈しい罵倒と嘲笑をくり返し行ってはいるが、理論的には、以上の内容を一歩たりとも出るものはない。

これに対して魯迅は、特に彼等とちがった革命文学論を提唱しているわけではないが、彼等の革命文学論には、鋭い批判を展開している。その基点となっているのは、文学は人間が作る、ということである。

私は根本問題は作者が「革命人」であるかどうか、ということにあると思う。もしそうであるならば、書いたものがどのような事件であり、用いたものがどのような材料であるかにかかわらず、すべて「革命文学」である。噴水から出るものはすべて水であり、血管から出るものはすべて血である。[15]」

このような立場から、魯迅はことさらに「革命文学」という看板をあげることには反対しているし、プロレタリア文学が生まれる可能性すら疑っている。労働者・農民が真に解放されずして、自らの思想を持つことはない、と考えているからである。[16]

かくて魯迅は、革命文学という発想、その現実の姿、そしてそれを唱える「革命文学者」にわたって、いずれに対しても鋭い批判を行うが、どれも致命的とまで思える急所をついている。

まず革命文学という発想については次のように批判を展開している。

だが私はこの様な文章は無力だと思います。なぜならすぐれた文芸作品はこれまで多くは他人の命令を受けず、利害を顧みずに自然に心の中から流露してきたものだからです。もし先ず題目をかかげて文章を作るならば、どうして八股文と異る所がありましょうか。文学の中には価値はなく、まして人を感動させることができないのは言うまで

もないことです。[17]

このように全く否定的であるが、魯迅はそこに文学を成立させている最も本源的なものの否定があることを、敏感にかぎ出している。

またかかる発想のもとに行なわれている革命文学の実態についても、魯迅が見たのは現実の暗黒を恐れ、現実を正視しない、逃避的な態度だけであって、[18]彼はそこに評価するに足る何物をも全く認めてはいない。

そしてまた魯迅は、そうした堕落が最もひどいのが、その提唱者である「革命文学者」自身であると言う。彼等は上海の租界に住み洋風の家に住み、コーヒーを飲み、それでいて「ただ自分だけがプロレタリアートの意識を把握している。だから私は真のプロレタリアだ。[19]」というようなことを口走っている。魯迅が彼等の中に見たのは、「貧乏秀才がまだ状元にならない時の不平不満[20]」であり、革命への「投機[21]」だったのである。魯迅の怒りの大半は、この人間的頽廃に向けられている。

魯迅にとっては文学は人間の魂が生みだすものであった。この一点を確信するがゆえに革命文学派が言うような光明をかかげた文学が、彼等の手によってこの暗黒の中国に生みだされることは信じられなかったのである。もしそういうものが存在するとすれば、どこかに欺瞞を内包せざるを得ない。その欺瞞を魯迅は、「革命文学者」の生活態度、精神の中に見ているのである。

このように魯迅は欺瞞の上に立つものとして革命文学を全面的に否定するのであるが、ここにはその当時の革命文学や革命文学者に対する批判とともに、革命文学の存立そのものについての根底的な問が含まれている。革命文学者の生活や現実逃避は、彼等の努力によってある程度直すことはできる。しかし、「お題目」の下に書くことによっては真の文学は生れない、という批判は根本的である。そこには革命文学は、はたして文学でありうるのか という基本的な問がある。作家を政治スローガンや史的唯物論の公式という観念の「客体」として扱うことによって文学は成立しうるのか、文学は作家が作品に対して常に主体の位置、つまり自分自身の想念を自由に定着するという人間的活動の位置を確保することなくしては成立しないのではないか、革命文学論はまさしくその条件を無視した上に成立しているのではないか、という問がこめられているのである。

だがこの問は文学の次元に限らず、より深く革命思想の実質につきささる。人間解放の文学を標榜する文学は、人間の活動を中心に据えた人間主義の思想に立脚しているのか、あるいは人間を観念の客体とする人間疎外の思想に立脚しているのか、という問題である。これは単なる革命文学論を越えた、いわばその基盤になっている中国共産主義運動の思想に直接つらなっていく問題であり、更には当時の共産主義運動を支配するコミンテルンのソヴィエトマルクス主義の思想的実質に対する鋭い問題提起でもある。

しかし、当時の論争の中では、そのような問題までは全く論及されていない。革命文学派は最も初歩的な、自分をごまかさず現実を正視するということすら、まともに受けとめていないのである。従って論争は全くの低水準、全くの不毛のままで終

っている。

しかし、両者が和解し、統一するためにはまだこのような問題の解決が残っていることを忘れてはならない。このような問題を理論的に解決することなくして統一するとするならば、それは無原則・無理論の統一であり、思想的頽廃をもたらすだけである。

左連の結成にあたって、前述したような理論的対立がどのように解決されたのであろうか。この点にこそ左連の思想性はかかっているのである。

(二)

左連結成の準備が始まるのは、馮雪峰によれば「一九二九年の十一二月」[22]であり、夏衍によれば「一九二九年秋」[23]である。時期的なニュアンスでは少しずれるが、秋も終りの頃から準備が始まり、冬の間に準備が整い、春の初めに結成にこぎつけた、と考えるのが妥当であろう。

この結成の指令が中国共産党から出ていることは確かである。その間の事情を夏衍は次のように書いている。

一九二九年秋、力を集中し当面の文学運動の任務を確立するために、党は我々のこの支部（閘北区第三街道支部）を中心として、文芸界と連絡をとり、統一的左翼文芸界の団体――これが翌年成立した中国左翼作家聯盟である――を組織するように指令してきた。[24]

これから準備にかかるわけだが、その間に為された事について、鄭伯奇は次のように言っている。

準備期間に党は若干の必要な措置をとった。すなわちそれ以前に紛争のあった若干の作家と個人的接触を進め、誤解を除き、統一組織を結成する有利な雰囲気を作りだした。例えば魯迅先生は馮乃超同志が彼を批評した文章に大いに不快を感じていた。実際には〝老〟の字は筆の誤りか誤植であり、ひどい気持があったわけではない。このような措置の下に、馮乃超同志と魯迅先生は面会した。魯迅先生は馮乃超同志に非常によい印象を持ち、誤解を除いたばかりではなく、話し会える友人となり、以後「左連」の工作に少なからぬ便宜をあたえた。党の具体的指導によって以前の各文学社団体の間にあった意見と誤解は消滅し、革命作家間の団結は強まり、統一組織結成のための基礎が定まった。[25]

但しこの文章が書かれたのは一九六〇年であり、そのことを考慮に入れれば、「党の指導」があまりに美化されていることを、割引いて考えねばならないであろう。それはともかく、この時点以前にすでに創造社・太陽社は党の指導下にあったのであるから、「各文学社団体の間にあった意見と誤解」はさほど問題ではなく、中心は魯迅にあったはずである。[26]そして、この頃、魯迅が度々出かけていることは、竹内実氏が書かれている通りである。[27]

このような一連の工作が一段落した後、一九三〇年二月十六日午後、魯迅・夏衍等によって上海で文芸運動に従事している人を集めて討論会が開かれる。出席者は十二名である。[28]その討論会のテーマについては次のように述べられている。

討論の題目は「過去の清算」と「目前の文学運動の任務の確立」である。過去の運動に対する討論の結果、四点の指摘すべきものが認められた。㈠小集団主義ないし個人主義、㈡批判の不正確、即ち未だ科学的文芸批評の方法及び態度を応用できないこと。㈢本当の敵、即ち反動思想集団及び全国に広くいる遺老遺少に不注意にすぎること、㈣ただ文学のみを高めようとして、文学が政治運動を助ける任務を忘れ、文学のための文学運動となったこと。次に目前の文学運動の任務に対して、最も重要と認めたことが三点ある。㈠旧社会及びそのすべての思想的表現のきびしい破壊、㈡新社会の理想の宣伝及び新社会の誕生の促進、㈢新文芸理論の建設。討論の結果、全会一致で必ず国内左翼作家を団結させ、共同してこの運動に従事しなければならない、と確認した。そこで討論の上ですぐに国内の左翼作家を組織する準備委員会が成立し、左翼作家の団体を組織する準備の責任を負うことになった。[29]

この討論会から二週間後に「左連」は成立するわけであるから、この討論会が左連結成の最後の仕上げだったのである。

この討論の結果に基いて準備委員会が起草したのが、左連の綱領である。従って、ここには魯迅と革命文学派との理論的統一点が表わされているはずである。しかし、その綱領はあまりにも短く、こまかい理論問題がどう解決されたかを見ることはできない。だがその発想の基調は明かに革命文学派のものである。それは、社会変革期の芸術は、解放闘争の使命を負うから、人類最後の解放闘争を闘う現在、作家はプロレタリアートの立場に立たねばならない、という骨子で書かれている。もっとも部分的には「芸術がもし人類の悲哀、哀楽を内容とするならば、我々の芸術はプロレタリアートが暗黒な階級社会の中で『中世紀』の中で感覚する感情を内容としなければならない。[30]」という一句があり、魯迅の主張の痕跡は認められるが、やはり文学の宣伝的任務を中心に据えている点は、革命文学派の思考である。

だとすれば、これによって魯迅と革命文学派の理論的対立は何ら解決していないことは明らかである。その事を両者はどう考えていたであろうか。

まず魯迅の態度を示すものは、あの有名な「左翼作家聯盟成立大会での講演」であるが、ここでは一九二八年に展開した革命文学批判を一歩も譲っていない。ただ連合戦線結成の必要を認め、戦線の拡大・新しい戦士の養成などを提案している[31]ことに、彼の統一への姿勢を認めることができるだけである。彼にとっては、理論的対立を解決した上での統一など思ってもいないのである。

これに対する革命文学派の態度を解く資料は乏しいが、一九三〇年二月に書かれた銭杏邨の「魯迅」がその手がかりになりうると思われる。銭杏邨はこの論文より以前に、一九二八年「死せる阿Q時代」を書き魯迅の現代的意義を殆ど否定した人物であって、彼はその中で魯迅の創作を次のようにきめつけたのであった。

確かに清末及び庚子義和団暴動時代の思潮を代表できるだけである。真に五四時代を代表できる創作は実は多くな

い。[32]

一九三〇年の「魯迅」はこのような魯迅評価を多少ながら訂正したものであって、ここでは魯迅の「吶喊」での封建勢力との闘いを高く評価しつつも、目的意識を獲得できなかったから「彷徨」しなければならなかったのだ、という意味のことを論じつつ、次のように魯迅を評価している。

私は絶対に魯迅に反封建的「吶喊」と「彷徨」の五四時代での役割及びその歴史的役割を否認しない。しかし、この種の役割は革命的現段階ではその先進力を消耗してしまっている。これも又絶対に否認してはならない事実である。

（中略）我々は魯迅がプロレタリアートの立場に立ち、新しい反封建的創作を生みだすことを期待している。[33]

魯迅を反封建の闘士と評価しつつも、やはり過去の人間として扱うことには変りはない。だとすれば、魯迅を左連の指導者として扱う態度では毛頭ないし、彼等の一九二八年の批判が間違っていた、と訂正する態度でもない。このように部分的に訂正していく態度の中には、自らの基本的正しさを確信する強い信念を感じさせられる。

左連を結成しても革命文学派の魯迅に対する不満は内攻し続けているのである。それは一九三〇年九月十七日、魯迅の五十歳誕生記念日のエピソードとしてスメドレーが伝える次のような話によっても確かめられる。

会がおわりに近づくと、ひとりの若い男が私の方に向いて悲しげに頭をふった。「失望したでしょう？　魯迅のプロレタリア文学にたいする態度ですがね。あれは青年の気持をくじきます。（中略）私はその若い批評家にむかって、「私は双手をあげて魯迅に同感だ」と答えてやった。[34]

革命文学派とて、魯迅との対立を理論的に解決した上での統一など全く考えていないのである。両者ともに左連の結成によって、これまでの理論的・感情的対立がとけたとは思っていないし、そのようなものとして統一があるとも考えていないのであって、もっと別なものとして統一を考えているのである。

だとするならば、両者を「統一」へと導いた要因とは一体何であったのか、という問題を次にさぐらねばならない。

(三)

一九二九年は瑞金を中心とする革命の根拠地と蔣介石側との対立が次第に激化していく時期である。この年の十二月には古田会議が開かれ、その後根拠地および紅軍は発展に向い、一九三〇年には根拠地の数十五、紅軍十三個軍、六・七万人になったと言われている。[35]これに対して蔣介石は一九三〇年の終りに第一次包囲攻撃を行うし、上海地区には出版法を施行し、言論の取締りを強化して、次第に反動の色彩が濃くなっていき、こうした言論の弾圧によって左翼作家の書く雑誌がなくなっていく様子は魯迅が「二心集」[36]の序言に書いている通りである。この白色テロに呼応して文化界では新月社等の反動文人がさかんに活動を行っている。

これ等の反動派の動向に魯迅が闘う必要を感じていたことは、先に引用した左連成立大会の講演で、反動勢力へ固い決意をもって長期的に闘う必要をといていることで解る。[37]左連成立大会

での提案は、この階級闘争を根底に据えてのものであり、決して私欲や党利党略のためになされたものではない。彼をつき動かしている根源的な動機は、この階級闘争を自分の場所で闘いぬこうという決意である。しかし、左翼が結集すれば、その力がさらに大きくなる、などと考えていたのではないこともまた明かである。この際思い起こされるのは、彼自らがマルクス主義理論を翻訳した動機を語った次の言葉である。

しかし、私が他国から火を盗んだ本意は自らの肉を煮ることにあり、味を一そうよくすることができれば、それを咀嚼する人が一面では一そう多くの利益をうけるし、私もまた自分の身体を浪費したことにはならない、と考えたからである。[38]

左翼作家連盟成立大会の講演に脈打っているのも、この決意である。それは翌一九三一年八月の社会科学研究会での講演、「上海文芸の一瞥」についても言えることである。魯迅は自らを革命人にきたえあげることによって、インチキ革命派を中国の階級闘争を担いきる真の革命家に育てあげようと考えているのである。これが魯迅の最も深い所にある気持であると思われる。ここには階級闘争を闘いぬく決意に満ちた見事な革命人の魂が脈打っている。

一方中国共産党の狙いは、魯迅と別な所にあった。この頃の文化界を見渡せば、一連の左翼文化団体の結成が相ついでいる事実が注目される。一九三〇年二月には中国自由運動大同盟が組織され、三月には左連、六月には社会科学作家聯盟、それから少し遅れて左翼戯劇聯盟、その後群少の団体の結成が続き、それが中国左翼文化総同盟の指導下にはいっている。その間の事情を丁易は次のように述べている。

中国左翼文化総同盟は中国共産党指導下の文化団体である。それは左翼作家聯盟、社会科学作家同盟、世界語（エスペラント）聯盟、映画人聯盟、新劇人及び美術家聯盟等が合作して組織された。成立後、それは当時の文化運動を指導し、発展させた。[39]

これによって中国共産党の方針として、一連の文化団体が結成されたことがわかる。

しかし、問題は党が如何なる政治路線の必要に応じて文化団体結成を行ったのか、ということである。党にとっては一九二九年末から三〇年初めにかけての時期は、一九二八年七月モスクワで開催された六全大会で決定された基調、およびそれを更に具体化した一九二九年六月の二中全会の決定を実践しつつあった時に当る。所謂「李立三路線」といわれるものが顕在化する以前の準備期である。六全大会では「革命の第一次高潮期は過ぎ去り、末だ第二次高潮に達」しないが、情勢としては「第二次革命高潮到来の必然性」があるので、「第二次高潮期に處するために党は大衆の獲得を方針とし、全力を挙げて無産大衆を獲得統一し、その団結に力を注ぎ、党の政綱に服従し、大なる組織運動に従事せしめ」て「武装暴動」に備えねばならない、[40]という活動の基本方針を決めている。

この活動の基本方針は二中全会になっても、何ら変更を加えられず、「ただ我等の大衆獲得の力に依って、はじめて革命の高潮の到来の早いか遅いかの行程が決定され得ることを強く認

定しなければならぬ。[41]」と「大衆獲得」を党活動の基本任務に据えることで、運動の方向はより明確になっている。そのために詳細な組織問題決議を行っているが、その中に次のような注目すべき方針がうち出されている。

現下の政治段階中に於てあらゆる闘争性質を有する労働者団体はすべて禁止せられ、圧迫せられて秘密活動となったから、これがためにあらゆる合法的或は半合法的団体、例えば「体育会」「読書会」「倶楽部」「疾病失業互助会」等を利用或は創造して、その援護下に於て大衆闘争を発展せしめ、党の政治影響を促進せしめ、以て工会の作用を加重して赤色工会組織にまで成長せしめ、且つ工会の公開存在を力争することは「我等の目前の支那革命の段階中に於ける最主要なる実際任務」である。[42]

これは直接には労働組合組織について出された方針であるが、前述した文化団体結成の事実によってみると、この方針が諸々の大衆団体の組織に適用されていたことがわかる。またそれが、やはり同じく「支那革命の段階中に於ける最主要なる実際任務」と認識されていることも想像に難くない。左連の結成もその任務遂行の一つとして行なわれたのである。

左連の結成に党が如何に真剣であったかは、許広平が「自由大同盟成立の前後」に「党中央」が「李立三同志と魯迅の面会を指令してきた。[43]」と書いていることによってもほぼ見当がつく。当時の中国共産党きっての実力者である李立三自らが出馬するという事実は、党側の決意がひととおりのものではないことを示している。それほどに共産党は魯迅を必要としていたということを証明するゆるがぬ事実なのである。それは恐らく、大衆の間に高い威信と強い影響力を持つ魯迅を除いて、大衆団体である左連を結成しても、その意味は半減するから大衆獲得という政治路線を遂行する上で、魯迅を加えた左連をどうしても作る必要があったからである。

魯迅と和解するために彼等は耐えたのである。成立大会であれほど痛罵されながらやはり彼等は魯迅を常務委員に選んでいる。それによっても如何に彼等が忍耐したかが想像される。しかし、その努力はあくまでも魯迅との感情的なしこりの解決のためであり、全く理論的な問題解決のためではないのである。綱領では何一つ解決されていないが、それを今後の活動の中で解決していこうという志向も殆んど放棄されている。彼等にとっては魯迅が提起した直接政治につながらない文学論などはどうでもよいのであり、目的はそれと全く別な所にあったのである。

馮雪峰は左連時代の党の指導について「瞿秋白同志個人が左連に対して実際的指導と大きな援助をした外には、その時の上海の党中央は文芸闘争と文芸創作問題に経験を欠き、関心も十分ではなかっただけではなく、同時に我々に明確な方向を与えなかった。[44]」と事実上、党には文芸政策がなかったことを述べた後「その時の上海の党中央と我々これら年若い党員の主要な者は、左連を直接政治闘争をする一般の大衆的革命団体だと思っていた。[45]」と書いている。この言葉を裏付けるが如く、魏金枝は左連時代の活動を回想して「私はあの時、よくデモとビラ撒きをしたことを憶えている。[46]」と書いている。

このように成立した左連は、党にとっては文学活動それ自身を推進する団体としてではなく、党の政策を代行していく「大衆的革命団体」として存在の意味があったのである。事実その後の左連の活動は、この党の路線に沿って進められており、魯迅の構想も、その問題提起もすべてを呑みつくして党の意図と政治路線は強烈に貫徹しているのである。左連の結成及びその後の活動を貫いているのは、この大衆獲得の政治路線であり、更にそれを支える人間の解放を党組織の強化に収斂して考える党組織至上論である。すべての問題はそこに一元的に還元されてしまい左連の活動が文学という独自の領域で、人間の問題を軸にして独自の花を咲かせることが全く閉ざされてしまっているのである。魯迅が提出した問題もまさにこの点にあったのであるが、それも棚上げされたまま放置されている。しかも魯迅その人ですら一九三六年の国防文学論争までの間、問題の行方を見失っているふうがあるのである。(この問題はこまかく検討してみる必要があるが、今後の課題として追求してゆきたい。)

ここで党組織至上論はもともと革命文学論と同じ思想の上に立脚するものであることに注目する必要がある。そこでの党組織拡大のための文学は、やはり文学の宣伝的機能が中心になることは必然である。作家はやはりその任務の遂行者としてのみ意味があるのであり、そうである以上作家はやはり観念——政治路線・政策という具体的な形をとることが多い——の客体であり、自ら苦悩し、思考し、判断するという人間的営みと自由な想念を定着する自立した存在ではない。人間は思考と行為を彼自らの責任に於て行う解放された存在ではない。それは魯迅が提起した人間の行為を軸にした人間主義の思想の上に立つものではない。やはり人間を客体化した思想の上に始めて成立しうるものであり、その意味では一九二八年の革命文学論と同一の思想的基調に立っているのである。

更に言うならば、人間解放を標榜した人間疎外の思想であり、人間の主体的実践の意味を理論的に欠落させた観念論なのである。

左連はこのようにして強烈な党路線の遂行機関として文学理論の本質的な問題を殆んどなおざりにして成立したのであった。従って左連の思想には、文学論ないし人間論の本来の性質からは相容れない二つの思想が同居しており、統一した全体としては思想的頽廃以外の何物でもないのである。そして「統一した全体」を支える党組織至上論は決して人間解放にストレートにつながる思想ではなかったのである。一九三六年の国防文学論争の要因はここに内包されており、更に今日の文化大革命につながる問題もここに含まれていた、と考えられるのである。

終りに

以上述べてきたような問題を含む左連の結成が行なわれたのは、中国共産党が大衆的基盤、特に労働者階級の中に基盤を持たず、全く大衆から遊離した組織状況の中であった。二中全会の組織問題決議も「目前の全国組織状況に據るに、極めて多くの党の弱点が見出される。その主要なもの、党の無産階級的基礎の薄弱さ、大衆組織との関係の不正確さ…」[47]と言い「支那の党は六全大会の時には、僅かに百分の十の労働者党員を有する

のみであったが、現在では更に縮少して百分の七となり、又農民党員も増減不定を極めている[48]」とその組織的弱体を認めている。

だとすれば中国共産主義運動は中国の現実――その歴史と人民の中に根を下さぬ知識人と少数の労働者・農民だけの運動だったのである。現実に根を下さず、そこでの血の通った実践が問題にならない状況が、その教条的・観念的な論理に反映されている。しかし、現実の具体的実践が問題になる限り、そこには必ず人間主体の実践の意味を理論的次元に於ても回復せざるを得ない。理論的枠組はあらかじめ設定されているが、それを具体的実践で乗りこえざるを得なかった所に中国土着の共産主義運動があり、その理論的反映が毛沢東思想であると思うのである。

文学に於ても観念的な革命文学から階級闘争の進展に応じて人民文学へと移行していくが、ここでも設定されたマルクス主義文学論の外在的枠組は固く、作家の主体が完全に回復されたとは思われない。

具体的実践に於て観念性を打破していくということは、今もなほ続いている過程である。文化大革命もそのような過程の中で見ていかねばならないだろう。これは文化大革命を見る一つの視点でありうると思うのである。

註

(1) 「中国左翼作家聯盟的成立」(「拓荒者」一九三〇年第三期一一二九頁)

(2) 同　前

(3) 鄭伯奇「〝左聯〟回憶片断」(「文学評論」一九六〇年二月七四頁)

(4) 夏衍「難忘的一九三〇年」(「中国話劇運動五十年史料集」中国戯劇出版社　一九五七年　一四七頁)

(5) 李初梨「怎様地建設革命文学」(「文化批判」第三号)

(6) 同　前(五頁)

(7) 真興『評茅盾君底、「従牯嶺到東京」』(李何林編「中国文芸論戦」一九三〇年、大安影印本二三七頁)

(8) 忻啓介「無産階級芸術論」(同前三一二頁)

(9) 註(5)に同じ。(九頁)

(10) 同　前(十二頁―十三頁)

(11) 谷陰『検討「検討馬克斯主義階級芸術論」』(註(7)と同書　三二六頁)

(12) 註(5)に同じ。(一七頁)

(13) 馮乃超「芸術与社会生活」(「文化批判」第一期五頁)

(14) 初梨「請看我們中国的 Donquixote 的乱舞」(「文化批判」第四期二頁)

(15) 魯迅「革命文学」(「而已集」魯迅全集、三巻、一九三八年版、五二五頁)

(16) 魯迅「革命時代的文学」(同前　四〇九頁)

(17) 同　前　(四〇三頁)

(18) 魯迅「文芸与革命」(「三閑集」(魯迅全集四巻、一九三八年版、九五頁)

(19) 魯迅「硬譯」与「文学的階級性」』(同前　二二〇頁)

(20) 魯迅「劇共大観」(同前　一一六頁)

(21) 同　前
(22) 馮雪峰「回憶魯迅」（人民文学出版社　一九五二年版　六三頁）
(23) 註（4）に同じ。（一四七頁）
(24) 同前　（一四七頁）
(25) 註（3）に同じ　（七四頁）
(26) 同　前（七四頁）
(27) 竹内実「左翼作家連盟の成立まで」（「東洋文化」四四号七一頁）
(28) 丁易「中国左翼作家聯盟的成立及其和反動政治的闘争」（「中国現代出版史料乙編」新華書店　一九五五年版　三七頁）
(29) 同　前（三八頁）
(30) 左連理論綱領（同前三九頁）
(31) 魯迅「對于左翼作家聯盟的意見」（註（18）に同じ　二三九頁―二四二頁
(32) 銭杏邨「死去了阿Q時代」（李何林編「魯迅論」北新書局　大安影印本七五頁―七六頁）
(33) 銭杏邨「魯迅」（同前　五九頁）
(34) スメドレー「中国の歌ごえ」（みすず書房「現代史大系四」昭和三二年版　八十頁）
(35) 註（28）に同じ。（三五頁―三六頁）
(36) 魯迅「二心集序言」（註（18）に同じ。一九五頁）
(37) 註（31）に同じ。
(38) 註（19）に同じ
(39) 註（28）に同じ（四二頁）
(40) 中国共産党六全大会「政治決議」（波多野乾一編「中国共産党史」第一巻　時事通信社　昭和三十六年　二三七頁―二三八頁）
(41) 中国共産党二中全会「政治決議」（同前三一五頁）
(42) 中国共産党二中全会「組織問題決議」（同前　三七〇頁）
(43) 許広平「魯迅回憶録」（作家出版社　一九六一年版　一三九頁）
(44) 註（22）に同じ。（五一頁）
(45) 同　前　（五二頁）
(46) 魏金枝「〝左連〟雑憶」（註（3）に同じ。八一頁）
(47) 註（42）に同じ。（三三〇頁）
(48) 同　前　（三五四頁）